

◇実践記録より◇

水族館ごっこ

藤 沢 章 子



— その経過のあらまし —

めっきり暑くなってきたこの頃では、子ども達の活動もいよいよ旺盛になり、殊に戸外での水あそび（水鉄砲、色水屋さん、水を使って遊ぶ、おままごと、砂場など）は大にぎわい。何といっても夏は水である。扱て、これらの遊びに出发点を求め、水族館ごっこにまで発展させようという意図なのである。夏は戸外の遊びが活潑になるだけ、また、疲れやすい時でもある。そこでまず「無理なく」ということを念頭に入れて序々に計画的に継続していくようプランをたてる。

○主題

水族館ごっこ

○目標

実際に水族館を見学したり、絵をみたり、話し合ったりして魚類への関心を深めると共に、自分達の手でも製作を通して水族館を再現しその社会遊びのよるこびを味わう。

○見学・観察

上野水上動物園見学

種々の魚の絵を部屋に飾っておく。

○言語

話し合い内容

魚の種類をあげる。（魚やさんの店、よく食べる魚…）

魚の住処（うみ、いけ、かわ）

魚のからだ（ひれ、うろこ、えら、はなめ、くち）

珍しい形や色の魚（熱帯魚のことなど）
たこ、いか、かに、えび、くらげ、などのこと。

昆布、海そう、岩

……お話海ひこ、山ひこ、浦島太郎 他。

○音楽リズム

お魚の自由表現

おさかなの ようちえん

おさかなの うんどうかい

おさかなの だんす

おさかなの おうち

おさかなの さんぽ

など適当に曲を使つてする。

○絵画製作

お魚つくり

海草、岩

空箱利用の水族館

すいれん、かえる、かめ

入場券 かんぱん

模造紙水彩画「海のなか」の共同製作

水上動物園の印象画

〇評 価

水族館ごっこに興味を持ち、進んで参加出来たか、どうか。

協同製作の場合も協力できたか。

幼児なりの魚の知識が得られたか。

参加クラスメモ。

五歳児、一級三十八名。(五歳児は二級あり、両方同じ行き方をした。)

七月二日より短縮保育になる。

第一期保育は七月十八日まで。水族館開館は七夕以後にする。

経過 準備

五歳児ともなると、その遊びはより活潑、發展的になってくる。水鉄砲はほとんどあくことなく動いているし、お砂場もいつのまにかおだんごやさんからダム工事に変わってしまっている。おままごととはケーキやサラダが

すたれて氷やのみのものが大はやり。このように水に大きく関心を持ってきた子ども達に、室内でも海や川の絵を誰にでも目の写るようなところへかかけておいたり、おゆうぎや歌に波のりや水遊びのリズムを使ったり、海の歌を歌ったりしてより興味を深めるよう持っていく。また子どもの持つてきたかきを題材に「かにのあかちゃん」の童話を劇作して聞かせたり、また水の大切なことも話して聞かせたりなどする。こうした程を経てある日の保育テーマは「おさかなについて」これも急に与えたものではなく、子ども達の会話から糸口をみつけ発展させたものである。さて、この日の「おさかな談議」はまことに活潑であった。一人一人発表して計三十五種のお魚が陳列された。普段一番よく食べていると思いう魚(いわし、まぐろ等)が忘れられてしまつて、エンゼル・フィッシュ、しびれえいなど、とび出す。あんがい昨日食べたお魚の名前がわからない。くらげがお魚だという子どももいた。「おさかなには足があるのかしら? 手は?」と聞いたらみんな即座に「ない」という。「それでは手も足もなくてどうしておよげるのかしら」といったら皆黙ってしまった。

た。(これは無理な質問。)男の子の一人が「しっぽがあるから泳げるんだよ」と答えた。「おさかなはごはん食べるのかなあ」とつぶやいた子どもに隣の女の子が「そうよ、ごはん食べるのよ」といったので皆に「お魚は何を食べるのかしら」ときいてみたところ「あぶく」だとか「はっぱ」だとか「ふ」とか「なにも食べない」「お魚の弱虫を食べちゃう(きつと親からきかされたのだろう)」などバラバラな答も面白く思った。海の底には「りゅう宮」があるとほんとに思っている子どもが数人いる。海にも絶対きんぎょがいるという子どもがいてみんなから「うそだ、うそだ」と叩かれた。今日は子どもの話を聞くことに重点をおく。こんなにもみんながたのしく活潑に意見をいい合うようになった成長ぶりを今更にたのしく眺める。私の方も子どもの夢をそがぬよう「学術的な説明」を避けてあくまでも「話し合い」としてあっさり片附けるよう気を配る。

まだ水族館の計画など話さない。子ども達は愈々この「神秘的な世界に興味を深くした」ようで二、三日はもつぱらこの種の話題でにぎわった。私も出来るだけ興味を失わせない

よう答に氣を遣つたり、あちこちから図鑑（やさしい幼年向きのもの）や絵本を雄めてきたりした。

見 学

水族館行きの日取りがきまる。その知らせは遠足と同じく子ども達に小躍りさせる。水族館というのがどういふものか、更に

「このあいだ皆さんで考えたお魚の他にまだまだ沢山お友達がいますから、よくみてきましょうね、魚屋さんにはない珍しいお魚も沢山いるのよ。」と含めておく。

さて水族館実地見学の日、普段の午前中をこの見学に当てたわけで、大きい組は付添なしである。水上動物園に入場してからは級別にみて歩くことになった。

水族館に着いたときは幸い人が二、三人、並んで見て歩くには重なる後の方の子ども達が気の毒なので（子ども達を待たせておいて危険がないことを試かめた上）自由に見学させることにした。これは大成功。あちこちの窓に群がり私の存在などまったく意識しないで魚に夢中になっている子ども達の様子に接し、しかも子ども達との自由な会話を聞きこ

たからである。

「わあ、でっかいかにだなあ」（かぶとかに）

「とっても光っているわよ。それごろんなさいよ。きれいなエ」（熱帯魚）

「赤ちゃんがいるよ。よしよしよし、お母さんのおっぱい飲まないのかな」（細かい魚）

「デン・キ・ウ・ナ・ギ。あつてんきうなぎだ。すごいんだぞお。」

側にいったら殺されちゃうんだから」

「た、こ、おい、たこがいるぞお」

「どれ、わっ、気持ち悪い、頭みてらん（なるほどふにゃふにゃしている）」

こんな子どもたちの驚きとうれしさを表わしたごく単純な会話があちこちでかわされる。

「わあ、沢山いるのねエ」これ位が幼ない子どもたちのせい一杯の感嘆詞である。玄関の近くにあった大龜はとても氣にいった様子、

「浦島さんの乗ったかめかもしれないよ」先生乗ってごらんよ」などとわいわいはしゃいで見ている。一つどころにじいっと立ちどおしの子ともいる。「何を感じているのかしら」と、とても興味深く眺められた。

水族館ではこんな具合にたっぷり時間をと

つて見た。余談だが笛を吹いたとき、全員がさっと集まってくれたのはとても嬉しかった。やはり「大きい組」である。子ども達が沢山の魚に接してどう感じたかは興味しんしんだったが、今日は触れない。

午後、お帰りの間近に「先生今日は面白かったわね」という女の子がいたそうね、先生もとても面白かったわ、〇〇ちゃんは何が一番面白かったの？」と聞いたたら「だってエおもしろかったわ」など、笑って答えた。水族館から帰ると皆夢中になって遊んだ。

話し合いなどでその上疲れさせぬよう氣を使ふ。

話し合い

翌日は話し合いである。

どんなものをみたか、どんな様子だったか水族館は水上動物園の一部にあった訳なので話しは水族館にかぎらない。それでも子ども達は結構いいだのべらだのいしだいなどと珍らしい魚を覚えてきて話題にした。殊に熱帯魚の美しさには子どもながらも強く感じたようでその後のお絵かきにも美しい熱帯魚を描いた子どもが多かった。男の子に人氣があ

ったのも面白い。でんきうなぎを描いた子どももいた。大龜は小さい組、大きい組を通じて最も人気があったようだ。魚の自由表現をさせてみると男の子は飛行機のように勇ましいものが多く女の子はやさしく気どりながら泳ぐ様子、

「○○ちゃんのお魚は何でしょう」と問うと「ぼくはとびうおだよ」という。なるほど飛行機のように似ていたわけ。同じようなしぐさの子どもにきくと「のこぎりざめ」だという。女の子たちは断然たいが好きらしい。初めのときの自由表現に較べてずっと表現が豊かになったような気がする。やはり実物をしつかり観てきたためかと思う。

製作

七夕が終って愈々本格的な水族館ごっこへは入る。

ここから始めて皆と水族館ごっこの計画を話し合う。

この間から実物をみたり話をきいたり、歌を歌ったり、遊戯の中でしたりして、みんな今度は何か作ってみたいくうずうずしていた時だったので、みんな大喜びでうなずく。

早速始めたいという意気込み。そこでまず、今までのこうした経験を経て、子ども達がどんな形で魚をとらえているか、どんなふうな表現をするだろうかという目的のために白紙の薄い画用紙を与える。どの魚がどういう形でどんな色をしているか、ひれが必ずついているものかあるとかないか、一切話していない。つまりここにあらわれるのは子ども達の「おさかな」なのである。「あなただけ一番好きなおさかなを作ってみよう」というと、どの子どもも勇んで作り出した。大きい組なので中に紙を入れる立体的なものを作ることにする。

先を急いで粗雑にならぬよう、一生懸命作することに重点をおき一日で仕上げなくてもよいことにする。その日は大ていの子どもが魚の両面を塗ることだけでせい一杯、翌日紙屑を細かくちぎってふんわりとお腹を入れるとまったく見事な魚が出来上がった。実物をお目につけた位だが、四角い魚あり、身体より尻尾の方が大きい魚もあればくじらのような怪物もあり、めだかのような繊細な出来ものもあり、中には又本物のようなくちやとびうおも交っている。色彩は一般に明るく

黄、朱、緑、赤などが好んで使われている。ほんとにこれでは「夢のおさかな」というにふさわしい。みな一様にいえることは誰しものびのびと表現していることである。型や名称には一向こだわっていないような様子。うろこやえらをつけた子どもが二、三人を除いてぜんぜんいなかったことも興味深い。とても華やかな色彩の魚を作った子どもに「これは何かしら？」と聞いたら「たいよ」と答えた。お友達に「君のペンギンみたいじゃないか」といわれ断然憤慨「ぼくのまぐろだよ」とも強いんだから」と大いばりで答えた子どももいた。

とにかく個性を盛った「ゆめ」のお魚が出来上がった。一人一人の性格を知って眺めると一応楽しい。なお魚のお腹に紙屑をはさむことはむずかしいかしらと多少懸念していたのだがここが一番おもしろかったらしい。乱暴に作ってきた子どもでも「おやおやお腹が見えちゃうわ」というと笑いながら一生懸命直してきた。裏、表、色を違えてしまった子どもも二人程いたが、大抵の子どもはよく分っていたようだ。

知識

ここで一通り「ゆめ」が出来上がった。今度は水族館の目的を真面目に考えてみよう。それは幼くない子ども達にも幼くない成りの魚の知識を知らせることではないだろうか。或る程度正しく知ることは大切なことである。

そこでまた話し合いの機会を持った。今度は私を中心に話を進める。この間の子ども達の話を参考に、魚には海にいますものといけやかわに住むものがあるということ。魚が何を食べて生きているかということ。魚のからだはどういうふうになっているか。どんなふうにして泳ぐかということ。海の底はどんなふうになっているか、暖かいには色や形が変わった魚がいるということ。魚によって各々形や色が違いまぐろのように大きいいわしはないことなど、苦心した表現で聞かせる。少々むずかしい事だったが童話的に話したり、絵を書きながら話したりしたので、大変熱心に聞いてくれた。すっかり神秘の世界に巻き込まれて、普段しないような顔つきをしていた子どもも沢山いたし、「せんせい、お魚は寒くっても風邪を引かないのか」という質問な

どとび出してますまたのしかった。

これで大分目的が達せられた。後は正しい知識をもつてなるべく本物のようなお魚を仕上げるのである。

水族館あそび

いよいよ魚ネツも本物になってきた。

金魚鉢の金魚を長い間「研究」していた子どもが「先生、金魚のまわれ右してみようか」といつてくるつとまわってみたりする。今まではただ絵をみていた子どもが「海の方が一パイ魚がいるのね」といったりする。もうこい海にいますなんていう子どもはいないようだ。家庭でもきつと「これは何かしら」と一応考えるようになったに違いない。いわゆる「物しり」でなくてもよいのだから「常識」は……と思う気持が半分の子どもには理解されたと思っている。

さて、そこで皆の好きな魚を作らせることになった。要領は前と同じ。結果は1/3以上の子どもが「ほんもの」の特徴をよくとらえていた。ぶり……なるほどぶりだ。かつおはかつおらしく、とびうおには動きがみられ、おしゃれなエンゼル・フィッシュはお出掛けの

ような恰好で、それぞれ上出来。でも集まったのをみたたいが多すぎる。

たいは表現がやさしいのだろう。でもこれでは水族館が半分のいやさんになってしまうので、皆に相談してみる。すると「わたしはかわいい」「ぼくはいいか」「べらがいいべら」などといつて各々ちつともあきっている様子もなく熱心。級中まさに魚ブーム、一番嬉しかったのは誰も喜んで参加したこと。余り製作の好きでなかった子どもまでがこのブームにあおられて涙ぐましいばかりの作品を製造してくる。三日程して幾種類もの魚が出来た。

くらげやかなど作った子どももいた。実際見てきた龜が子どもたちには忘れられずボール紙を与え私もピンをさすところを手伝ったりしてほんもののような龜を協同製作でこしらえた。

この魚ブームでお遊戯もさかんに魚あそびをした。前記したように「おさかなの幼稚園」ごっこをしたり「運動会」をしたりして楽しんだ。

「おさかなでは何が一番早く泳ぐか」との問いには困ってしまった。

だんだん動きがマンネリズム化された傾向

もあるようなので題材を変えなるべく豊富な動きが出来るよう気を遣った。

次は各自家庭から持ちよった空箱に色を塗ったり、海草や岩などの附屬物を付ける仕事。この日は特に子ども達の状態が良く独創的な附屬物が多かったことは嬉しかった。赤や朱の色紙で「サンゴ」を作ったり、「たこのお家」を作ったり「あぶく」を描いたり、海そうや水草にも種々変わったものがあり面白かった。お魚のお友達をつけた子どももいる。面白いのは二枚の紙でお魚を作りのり代で両端をとめたもの等、これは立体的なお魚のひらひら泳ぐ様子が非常によく表現されていた。

箱の上の題字も自分達でうまく書いて掲げた。書けない子どもは手伝ってあげる。細い造花用の針金で魚をつるすのだが、これはむずかしいので私が出来た子どものからつるすを手伝う。子どもたちは一生懸命作ってやっと出来た製作品を持って大喜び。一方空箱が沢山ないので「ゆめのお魚」はみんな相談して大きな水族館を作ることにする。丁度ローカーの上に張れば子どもの目の高さにも適当なので、そのため模造紙を用意する。

面積も広いので大ぜいの子どもが皆満足いくようにもなる。「ボク描く」と最初にいった男の子は竜宮を大胆に書きのけてしまった。「ゆめのお魚」だからそれもよいだろう。岩も海そうもふんだんにある、にぎやかな海が出来上がった。これをローカーに張り合わせた。級中海のような錯覚がする程、その周囲にテープを張ったならなお感じがでた。子どもたちがお魚みたいに部屋中を泳ぎまわる。ひもを二筋程通してそれに「ゆめのおさかな」を次々とぶら下げていった。誰かが「生きているみたいだね、だって動くもの」といった表現はあてはまる。ぼくのは「ここ」わたしのは「ここ」でひもが切れんばかりに引張ったりする。これでいよいよ子どもたちの期待が倍加されてきた。

お部屋の隅にはやはり模造紙のお池を作った。周りに石や草を描いて感じを出す。みんなせつせと協力。ちっとも笑わない子まで誰かと顔見合せて笑ったりするほは笑ましさ。

水族館に招待

水族館開館の前日は準備に大忙がし。

「あした、すいぞくかんごつこをしますから、みにきてください」

といったお手紙を書く子ども、入場券を作っている子ども、みんな一生懸命、お遊戯室からは大積木が子ども達の手で運ばれた。やがて、お手紙と入場券はお当番さんに各室へ配ってもらう。机と積木を整理してみんなの作った水族館をきちんと並べていく。お池には大龜やすいれん、かえるなどを置いた。戸口にはかんばんを張る。さあ！これで出来上り。いよいよ明日は「水族館びらき」子ども達はたのしみに帰宅する。

期待していた開館日である。いつもより子ども達の登園が早い。どの子ども大はしゃぎ、「わたしのをあててごらんさい」とか「これはかれています。これはたこです、これはさばです」なんて片っ端から読みあげる子どももいる。みんな集まってから切符係をきめた。

「早く来ないかなァ」とどの子もお客様を喜んで迎えるようにしている。しばらくして小さいお友達が見に来た。すぐ一人ずつ手をつないで「御案内」をする。お兄さん、お姉さんぶって「これいいでしょう」とか「これ〇〇

です」とかいつている様子はまことにほほ笑ましい。

説明をきいているとあまりユーモラスで思わずお腹を抱えてしまう程もある。小さいお友達がまたうんうんうなずいている様子もかわいらしい。「ごあんない、ごあんない」といいながらさつさとまわってしまいう子どももいる。「ゆっくりまわりましょうね」というと今度はとても丁寧に「これね○○なの、あれっこれうろこないや。ほんととらう。こがあるんだよ」などといっている。他のは通りこして自分の作った水族館の前へさつさと連れて行き、「これじょうずでしようねエじょうずでしょう？」と相手がうなずくまで何度も聞いている。「夢のお魚」もあってよかった。各自思い思いの説明を加えているのである。小さいお友達が一々手にとってみるのを「これはかつおです。おおいからかつおなのよ」ともっともらしくいう。すると次の子どもは「これはいわしです」と前と同じ魚をそう呼んでいる。これはいいのじゃないかしら。この「御案内」は大そうよかった。お兄さんお姉さん気分を充分堪能した上、何よりも「話」をしたことが良かったと

思っている。彼らにしては自分から話をする（与える）という機会はありませんのだから。皆が観終った後、もう一度お友達の世界を観る。

そして水族館は終わった。

「みんなが一生懸命考えて作ったので、こんなに立派な水族館ができましたね。みにきて下さったお友達もとても嬉しそうでした」

後記

これで一応終った訳ですが、私の経験が何分にも浅く、また研究不十分であるため、各所に未熟な点を残したように思い、お子さんには申しわけなく思っています。

お子さんが非常に喜んでこの遊びに参加したことは唯一の慰めでしたが、考えてみるともう一歩であきあきするところではなかったかと思い、もう少しあっさりしてもよかったかしらと反省しております。未熟な点御指摘、御批判頂ければ幸甚に存じます。

鯛（例えば製作の後仕末など）のことはこのごっこ遊びを通しずっと実行してまいりましたのですが、ここではふれませんでした。

（筆者は大和郷幼稚園教師）

広島大学教授 莊司雅子著

フレーベルの教育学

上製本カバー付
A5判 354頁
定価 400円

東京学芸大学附属竹早小学校教諭 渡辺 茂 共著
東京学芸大学附属幼稚園教諭 安藤寿美江

保育のためのうたとリズム

めだかのくに

美麗装幀
B5判 60頁
予定価 200円

株式会社 フレーベル館

増刊発売中

増刊発売中